



## 「開国博Y150通信」(第5号)

### ～ 開幕前イベント特集 ～

### <Y150イベントカレンダー>

エリア	開催場所	4月
ベイサイド	エリア全体	★4/23 プレス ・プレビュー ★4/27 ・開会式 ★4/28 <b>開幕</b> ・市民向け内覧会
	ベイサイドエリア周辺	★4月中旬 ・「ラ・マシン」プレイベント

#### ■4月の主なイベント

<p><b>ベイサイド</b> 4月中旬</p> <p>4月23日(木)</p> <p>4月27日(月)</p> <p><b>4月28日(火)</b></p>	<p>「ラ・マシン」プレイベント</p> <p>プレスプレビュー、市民向け内覧会</p> <p>開会式</p> <p><b>『開国博Y150』開幕</b></p>
---	---

※プレスプレビュー、開会式など各イベントについては、内容決定し次第、別途ご案内状をお送りいたします。

※ヒルサイド「創発プロジェクト」メンバーへの取材は、随時受付中です。

- 報道関係者 問い合わせ先 -  
 開国博Y150広報事務局 金垣・麦谷・平手  
 TEL 03-3403-5139 FAX 03-3403-0508 E-mail:y150@ozma.co.jp



## <ベイサイドエリア>

### ラ・マシン プレイベント

#### <概要>

4月28日(火)開幕前に、日本初上陸の巨大スペクタクルアート劇団「ラ・マシン」の魅力をも十分に満喫できるプレイベントを行います。巨大なクモが横浜に登場。ご期待下さい。

<日程> 4月中旬

<場所> 「開国博Y150」ベイサイドエリア会場 周辺  
(横浜・赤レンガ倉庫周辺)



※写真は2008年イギリス・リバプールでの作品です。

### プレスプレビュー、市民向け内覧会

#### <概要>

4月28日(火)開幕に先立ち、ベイサイドエリアのプレスプレビューを行います。「ENEOS ラ・マシン」や「アースバルーン」などをご覧いただけるほか、「BATON」第1章も上映いたします。「開国博Y150」の魅力をご体感ください。

<日程> 4月23日(木)

<場所> 「開国博Y150」ベイサイドエリア会場  
(横浜・赤レンガ倉庫周辺)



アースバルーン「HOME」上演時イメージ

### 開会式

#### <概要>

会期前日に横浜市長などが登場し、「開国博Y150」の開幕を宣言する開会式を行い、50年に一度の大祭典「開国博Y150」を盛大に盛り上げます。

<日程> 4月27日(月)

<場所> 「開国博Y150」ベイサイドエリア会場  
(横浜・赤レンガ倉庫周辺)



※各イベントについては、内容決定し次第、別途ご案内状をお送りいたします。

# 開国博Y150 各コンテンツ開催時間のお知らせ

「開国博Y150」の会期スタートを約1ヶ月後に控え、ベイサイドエリアの各コンテンツの開催時間が決定いたしました。

## Y150 はじまりの森(新港地区8街区)

### ENEOS ラ・マシン

- 【開催】 2009年4月28日(火)～9月27日(日) 10:00～22:00
- 【展開内容】 巨大クモによる、スペクタクルアート。「Y150はじまりの森」会場内のエリアを歩きまわり、みなさまに驚きと興奮をお伝えします。
- 【スケジュール】 1日5回 各回約20～30分(いずれも予定)  
※混雑等の状況により内容を変更する場合がございます。ご了承ください。

### ENEOS ナイトピクニック

- 【開催】 2009年4月28日(火)～9月27日(日) 日没～22:00
- 【展開内容】 横浜の夜をさらに魅力的にする“ナイトピクニック”。ファンタスティックな光と影の世界をお楽しみください。

## Y150トゥモローパーク(新港地区7街区)

### 未来シアター「BATON」

- 【上映期間】 2009年4月28日(火)～9月27日(日) 10:00～22:00  
※3部作、各章約20分の構成で、会期中3シーズンに分け、順次上映予定。
- 【上映スケジュール】

上映作品タイトル		期間	上映時間
第1章	密航者	4月28日(火)～5月30日(土)	1時間に2回上映予定 ※各回約20分
第2章	アポロとミカル	5月31日(日)～7月10日(金)	
第3章	サイファー	7月11日(土)～9月27日(日)	

- 【プロデュース・脚本】 岩井俊二(映像作家)
- 【監督】 北村龍平(映画監督)
- 【出演者】 市原隼人/上戸彩/大杉漣/ケイン・コスギ/ミムラ/藤原竜也(特別出演)/内藤剛志 他
- 【制作会社】 株式会社円谷プロダクション、Tit Mouse .inc
- 【作品概要】 俳優の実際の演技を特殊な技法を用いアニメ化する、岩井俊二氏プロデュースのアニメーション作品。宇宙旅行が容易になり、惑星間での移民も行われるようになった近未来を舞台に、過去から現代へ、そして未来へと、大切な何かを繋ぎ残していくSFファンタジーです。

## アースバルーン「HOME(ホーム)」

【開催】 2009年4月28日(火)～9月27日(日) 19:25～21:15  
※原則として毎日実施、但し荒天などにより中止となる場合があります

【タイトル】 「HOME」  
【上演スケジュール】 ※1日4回(予定) 各回約5分間上演

【演出チーム】 監修:向井千秋氏  
<宇宙飛行士・宇宙航空研究開発機構(JAXA) 宇宙医学生物学研究室室長>  
プロデュース・演出:滝沢直己氏<ファッションデザイナー>  
音楽監督:服部隆之氏<作曲家>、映像監督:西郡 勲氏<映像作家>  
原画:Brakichi/米澤 拓也

【展開内容】 ベイサイドエリア夜の目玉イベント「HOME」と題したナイトショーは、会場上空約10mに浮かぶ地球をかたどった直径約20mの巨大バルーンに、『人類が帰るべき故郷の惑星は地球である』というメッセージを、音と光と映像で表現。約5分間のプログラムには、向井氏がシャトルから見た時の地球や、人間の手によって破壊されていく地球環境への危機感、地球を大切に思う願いから再生に向かうストーリーを演出。地球の環境や美しさを守ることの大切さを伝えます。

## NISSAN Y150ドリームフロント & スーパーハイビジョンシアター(新港ふ頭)

### スーパーハイビジョンシアター

【開催】 2009年4月28日(火)～9月27日(日) 10:00～22:00

【展開内容】 横浜でしか体験できない、超大型540インチ(約50畳分)の大迫力映像を展開。NHKが研究開発している、これまでのハイビジョンの16倍という画素数、世界初4320本の走査線による超高精細映像システムと、35スピーカーを立体的に配置した22.2マルチチャンネル音響による究極の臨場感を演出。

※1回につき、約300人収容 約10分間上映(予定)

【スーパーハイビジョンシアター スペック】

- スクリーンサイズ 540インチ(横12m×縦6.7m、現存するスーパーハイビジョンスクリーンとして、世界最大)
- 画素数 3,300万画素(ハイビジョンの16倍、映画の約4倍)
- 音響 22.2マルチチャンネル(映画の約5倍、35スピーカーを予定)

※今後、開催時間が決定したコンテンツに関しては、開国博Y150公式サイト  
(<http://www.yokohama150.org>)にて、順次ご案内いたします。

## 開国博Y150 ニュース

### ニュース

開国博Y150のチケットを提示すると東京ディズニーランド®・東京ディズニーシー®のパスポートがおトクになる「横浜開港150周年記念スペシャルパスポート」を販売。

下記の特典は、ベイサイド入場券(実券)、ヒルサイド入場券(実券)どちらでも受けられます。

【タイトル】 横浜開港150周年記念スペシャルパスポート

【対象パーク】 東京ディズニーランド、東京ディズニーシー

【実施期間】 2009年6月3日(水)～9月27日(日)

【販売期間】 2009年4月3日(金)～9月27日(日)

【料金】

<大人(18歳以上)>	5,400円(通常価格:5,800円)
<中人(12～17歳)>	4,600円(通常価格:5,000円)
<小人(4～11歳)>	3,700円(通常価格:3,900円)

【販売対象】 開国博Y150 有料会場チケット購入者、旅行商品購入者

【販売場所】 (1)東京ディズニーランドもしくは東京ディズニーシー窓口  
(2)JRびゅうプラザ  
(3)大手旅行代理店等

【販売方法】 開国博Y150の有料入場券を上記販売所にてご提示いただくと、入場券1枚につきスペシャルパスポート1名様分お買い求めいただけます。

◆東京ディズニーリゾート現地で販売している前売券は”チケット実券”での販売。

◆旅行会社での販売は観光券のみ。

【問合せ先】 総合案内 東京ディズニーリゾート・インフォメーションセンター  
TEL 0570-00-8632(9:00～19:00)

【その他】 ※旅行会社にて開国博Y150入場券と横浜開港150周年記念パスポートのセット販売もあります。

※パークの入園口にて開国博Y150入場券を確認させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※スペシャルパスポート購入後、開国博Y150入場券裏面に確認印を押させていただきます。

※全期間入場券についても1枚につきスペシャルパスポート1枚の販売となります。

※回数割引入場券も1枚につきスペシャルパスポート1枚の販売となります。

※無料券、招待券では、スペシャルパスポートの販売はいたしません。

※開国博Y150の入場券をお持ちでない方には販売いたしませんのでご注意ください。

## 開国博Y150 横浜歴史コラム(第5回)「黒船から半世紀 白船来航」

1853年(嘉永6年)、ペリー艦隊率いる「黒船」の来航により日本は開国し、文明化、近代化の契機になりました。それから100年後、実は「黒船」ならぬ「白船」が再び日本を訪れたのです。

1908年(明治41)年、チャールズ・スペリー提督が率いる「米大西洋艦隊」の白船が世界一周航海の途中、横浜に来航。当時の世界情勢は、日露戦争に勝利した日本が世界列強と肩を並べ、欧米諸国の脅威となっている状態でした。それを背景に、米政府は自国の海軍力を誇示するため、白船艦隊を日本ならびに世界へ派遣。しかし、横浜市民の予想を超えた歓迎と歓待にアメリカの世論も沈静化し、緊迫した日米関係緩和の機会となりました。横浜市民の寛大な態度が、日米関係の改善の一助となったと考えられます。

「白船艦隊」とは、乗員数が約13,000人にもものぼる大艦隊であり、白く塗られた船体から「白い大艦隊(グレート・ホワイト・フリート)」と呼ばれていました。1907年12月16日、世界周航を開始した白船艦隊は、2年後の10月18日、16隻もの大編隊を組んで東京湾に到着。日本の接伴艦隊に出迎えられ、その後横浜港へと進みました。黒船の出現に強い衝撃を受けた日本人は、半世紀を隔てて再び来航した白船艦隊に対しては、大躍りして歓迎し、市中は熱気に包まれました。民間が仕立てた艦船見学の参観船の数々、祝砲や礼砲のとどろき、各所で打ち上げられる歓迎の花火、そしてこの光景を一目見ようと早朝から横浜港に殺到する群衆。また、政府もメディアもそんな世論を喚起し、官民挙げて歓迎準備に努め、熱烈な白船フィーバーに繋がりました。



アメリカ艦隊歓迎園遊会会場入口の光景  
(横浜開港資料館蔵)



弁天通りに掲げられたアメリカ艦隊を歓迎する  
星条旗(横浜開港資料館蔵)

<監修> 西川武臣(横浜開港資料館・主任調査研究員)  
<出典> 神奈川新聞社「神奈川新聞」(2008/10/17付)

## 開国博Y150 横浜はじめて物語(第5回) 鉄道発祥

1867年(慶応3年)末、アメリカ公使館員ポートマンが京浜間に鉄道を敷設する許可を幕府から得ました。これをどうするか、明治新政府が抱える問題の一つでしたが、1869年(明治2年)許可を取り消し、政府の手で建設することを決定しました。建設工事は1870年(明治3年)3月頃には始まり、まずは民部大蔵省(※1)に鉄道掛(※2)を置き、横浜野毛町元修文館に出張所を置きました。同じ頃、建設師長モレルと副役のダイアック、イングランド、シェファードが来日し、測量に着手。その結果、前年埋め立てられた野毛町海岸を停車場敷地に決定、5月には神奈川青木町海岸から石崎までの海面埋め立てを実業家・高島嘉右衛門に委託しました。嘉右衛門が突貫工事で、期限内の1871年(明治4年)2月までに竣工させ、埋立地に高島町の名を遺したことはよく知られています。

明治4年8月に横浜・神奈川間で試運転が行われ、9月には我国最初の鉄道駅舎である横浜駅が完成。翌年5月には横浜・品川間で仮営業を開始しました。途中駅はなく、所要時間は35分。神奈川・川崎両駅が開業したのは6月5日で、6月10日付『横浜毎日新聞』では、「あたかも人間に羽翼を付して空天を翔けるに似たり」と形容しています。

明治5年9月12日、横浜・新橋間が全線開通し、明治天皇が出席して盛大な開業式を開催。当日市街は15万張の提灯で飾られ、5千人の見物客で賑わったと言われています。居留外国人を代表してマーシャルが、横浜商人を代表して原善三郎がそれぞれ天皇に祝辞を述べ、さらに開業式にあたり、工部省鉄道寮が入場券を発行。これが入場券の始めとされています。この日を陽暦に換算した10月14日が鉄道記念日となっています。



横浜駅構内に停車中の機関車と客車

区間	出発時刻	賃金
横浜 - 品川	7:00	10銭
品川 - 横浜	7:30	10銭
横浜 - 石崎	8:00	20銭
石崎 - 横浜	8:30	20銭
横浜 - 新橋	9:00	30銭
新橋 - 横浜	9:30	30銭

汽車出発時刻及賃金表(開業当時のもの)

『幕末明治文化変遷史』より。

- ※1: 民部省は明治2年4月に設置された民部官が7月に改称されたもので、内政を担当する役所。8月に大蔵省と合併して民部大蔵省となる。再度分離したのが明治4年に廃止され、その事務は大蔵省と工部省に引き継がれた。  
 ※2: 鉄道の建設・運営を担当する役所。明治3年民部大蔵省に設置され、その後工部省鉄道寮-鉄道庁-鉄道局-鉄道院-鉄道省などを経て、戦後は日本国有鉄道(国鉄)が業務を継承した。

<監修> 斎藤多喜夫(元横浜開港資料館調査研究員)  
<出典> 横浜開港資料館「横浜もののはじめ考」(P118、119)